死者の蘇生など、もとになった表徴が有していた様々な性格が保たれているようである。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史学研究室）

扁鵲　其の二

家本誠一

史記扁鵲伝には三つの症例が記されている。

一、趙簡子　不知人

二、虢太子　尸厥

三、斉桓侯　病在骨髓

この症例を検討し、素問の記載と対照して、扁鵲伝の医学の性格を明らかにする。

病位の意義

斉桓侯例の要点は次表の様である。

病位　腠理→血脈→腸胃→骨髓

治方　湯熨　鍼石　酒醪　不治

病勢　軽症　中等　重症　死症

病気には、外邪に感じて起るものと、邪によらず、精神的ストレスなどにより内部から発症するものとがある。後世の所謂外感と内傷である。外邪が形体を侵襲する経路は

次の通り（素問・繆刺論）。

皮毛（腠理）→孫絡→絡脈→経脈（血脈）

経脈からは腸胃に散ずる場合と五蔵に行く場合とがある。この順序は扁鵲伝と同じ。

素問の臨床では病位の決定が重要な意義をもっている。病が体表部に在るときは初期・軽症で予後も良好である。内部に侵入してゆくにつれて慢性化し重症化する。治療法も病位に応じて選択される。即ち予後も治方も病位によってきまるのである。

扁鵲伝では「病骨髄に在る」ものを不治としている。素問では「五蔵を治するものは半ばわ死し半ばわ生く（陰陽応象大論）」とあるように「病五蔵に在る」ものが最重症である。このような差違はあるが、病位と予後治方の相応する様子はよく一致している。

〔尸厥の病理〕

虢太子の病理の要点は次の通りである。

以陽入陰中→動胃→・・・

陽脈下遂　陰脈上争→・・・

破陰絶陽　之色已廃　脈乱

故　形静　如死状

右の記載に対応する素問の文章を挙げる。

陽入之陰　則　静

陰出之陽　則　怒

宣明五気篇

陰気盛於上　則　下虚

下虚　則　腹脹満

腹満　則　下気重上

而邪気逆

逆　則　陽気乱

陽気乱　則　不知人也

腹満　甲乙経に従う

厥論篇

邪客於手足少陰太陰足陽明之絡

・・五絡俱竭　令人身脈皆動而

形無知其状　若尸　或日尸厥

繆刺論

以上に述べられた尸厥の病理を要約する。平常人に於ける陰陽の気の支配状況をみると、頭や上半身は陽優位で、足や腹部は陰優位である。病によって、頭の陽優位の状態

がくずれ、陰気が優勢になると、腹部の膨満が起ると共に、更に下の陰気が上衝し、これにつれて邪気も逆上し、頭部の陰陽の気の支配状況が錯乱する。その結果として人事不省となる。一見死人の様（静）であるので尸（屍と同じ）という。気の逆上によって起る病症を厥というので尸厥ともいうのである。

尸厥の病理の解説においても、扁鵲伝と素問はよく一致している。尚、甲乙経巻十一には、陽脈下墜　陰脈上争発尸厥　第三なる項目があり、その治方を述べている。

〔診断・治療の方法〕

扁鵲伝と素問の診断法を対比する。

扁鵲　切脈・望色・聴声・写形

素問　切脈・察色・聴音声・観形之盛衰

素問にはこの他にも詳細な診断法の記載があるが、要点は脈色と証（症状）の観察と尋問である。何れも体表部に現われる所見である。俞跗が「一撥して病の応を見る」といい、扁鵲が「病の応は大表に見わる」というのも、素問の診断法との一致を示している。

次に治療法の種類を対比する。

俞跗　湯液・醴灑・鑱石・撟引・按抑・毒熨

素問　毒薬・醪薬・鍼石・導引・按蹻・熨引

異法方宜論・血気形志篇

扁鵲は虢太子の治療に当り、八減之斉（湯液）、鍼石、五分之熨を使っている。三者共に同じ治療法である。

〔結語〕

扁鵲は春秋時代の医師である。この時代の医学は、秦漢の交に成立したと考えられる素問霊枢に比べてその程度はより低かったと思われる。しかるに、扁鵲の医学は素問のそれとよく一致している。又、その経歴も其の一でみたように素問霊枢の医師像とよく似ている。

即ち扁鵲伝は、時代を春秋にかりているが、司馬遷と同時代の医師や医学の姿を色濃く反映しているように思われる。

倉公伝の病歴が、素問霊枢では仲々うまく解釈できないのとよい対照をなしている。

（横浜市　開業）